OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「CALL授業を担当して」
Author(s)	越智, 正男
Citation	サイバーメディア・フォーラム. 2004, 5, p. 47-48
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/73061
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

「CALL 授業を担当して」

越智　正男（言語文化部英語教育講座）

はじめに

CALL 教室ではじめて授業を行ったのは昨年（2003 年）の後期であったので、私にとって CALL での教育歴はまだ 1 年ほどにすぎない。まだまだ私の側に不慣れな点が多く、受講生の人たちにいろいろと迷惑をかけたと思う。学期末に行われるアンケートに書かれていたコメントや批判を謙虚に受けとめつつ、今後に生かしていきたいと願っている。また、昨年も今年も、TA の人達の手助けなしには、CALL での授業が円滑に進まなかったであろう。TA として絶大なるサポートを提供してくれた言語文化研究科の院生の方々にこの場を借りてお礼を申し上げたい。

授業の内容について

昨年度後期は速読・多読に重点を置いたクラスで CALL 教室を使用し、今学期（2004 年度前期）はリスニングに重点を置いた授業を CALL 教室で担当したのだが、ここでは、主に後者について述べてみたいと思う。授業の計画をたてるにあたり、CALL 教室の利点を生かしつつ、同時に従来型の普通の教室で行う授業の要素も取り入れられないだろうかと考えてみた。あまりいろいろな要素を詰め込むことはかえってよくないので、90 分の授業で無理なく両者を取り込むにはどのような教材を使用するのがよいのかと考え、その結果、NetAcademy という CALL 用のソフトとビデオ教材の二つを柱にして授業の構成を考えた。

NetAcademy を使用するには、統一アカウント用のパスワードに加え、ポータル用のパスワードが必要になる。予想したことであったが、最初の数回の授業では、どちらかのパスワード（特に後者）を忘れてくる受講生がおり、対応に苦労した。例えば、サイバーメディアセンターの方々にお願いして、仮のポータル・パスワードを数人分発行してもらったりもしたが、それで NetAcademy を使用してもらっても、あくまで仮のアカウントでの使用であるため、結局は受講者自身のアカウントに再度アクセスして同じ問題を解いてもらうことになる。ただ、授業を重ねるたびにパスワードを忘れる受講者の数は減り、その意味ではこの問題はクリアーできたと言ってよいだろう。NetAcademy は使用方法が非常に簡単であり、受講生のパソコンの習熟度に関わらず、使いこなすのは容易であると思う。このソフトには様々なコースが用意されているが、今回はその中のスタンダードコースを使用した。授業の性格上、リスニングの問題に時間を割くことが多かったが、場合によっては、読解問題にもチャレンジしてもらった。また、学期の後半からは、TOEIC 演習問題に時間を割き、受講者に問題形式に慣れてもらうことにした。受講者各自が自分のペースで学習を行えたのではないかと思う。こういった演習問題は、1,2 年生にはややレベルが高いかもしれないと感じたが、それでも毎回繰り返す内に、問題形式にも慣れ、正解率が上がった学生も少なくない。阪大でも、TOEFL-ITP を導入する学部が近年増えてきており、TOEIC や TOEFL などの外部テストへの関心は入学したての学生でもすでに高いのではないだろうか。ちなみに、NetAcademy には他にも目的に合わせて、様々なコースが備わっており、実際に私は今学期の英作文の授業でこのソフトを紹介し、受講生に作文用のコースを試してもらったりもした。

また、NetAcademy に加え、時事英語のビデオ教材を毎回の授業で用いて、英語の総合的な学習の時間とした。毎回 1 つのユニットを終わらせることを目標に設定し、リスニングに加え、内容理解、重要語句の確認や解説などにある程度の時間を割くことにした。また、受講生各自にパソコンを用いて、その日のトピックに関連する website にアクセスしてもらい、こちらの質問に対する答えを探したり、考え

てもらったりもした。さらに、ソフトテレコというソフトを用いて聞き取りの練習を行った。このソフトは、パソコンを用いて LL のテープレコーダー機能を実現するものである。すでに用意されている TOEIC 用や TOEFL 用の学習教材（音声データ）を使用できる外、カセットやビデオなどのメディアに収録されている音声教材を自分でサーバーにアップロードして使用することもできる。私の場合、教材のテキストをスタジオ録音したものをサーバーにアップロードし、授業中に受講生にそれをダウンロードしてもらい、聞き取りの練習をしてもらった。そして、聞き取りや内容理解のクイズを毎回授業の終わりに提出してもらい、こちらで添削して次回の授業で返却し、解説を行った。聞き取れているようで、案外聞き取れていない部分があることを認識してもらえたのではないかと思っている。

反省点、問題点など

反省点はいろいろとある。まず、CALL 用のソフトとビデオ教材の組み合わせというのは、90 分の授業としては密度が濃かったかもしれない。受講生の英語に対するレベルや熱意にかなりの差があったため、満足度の高い受講生がいる一方、消化不良になった受講生もいたようである。また CALL 教室の授業は大人数なものになる傾向があり、学生一人一人とのコミュニケーションをとるのに困難を覚える場合もあった。CALL の場合、出欠の確認がスカイメニューなどで瞬時に行えるのは魅力であるが、やはり一人一人に声をかけるという意味では、従来型の出席確認方法にもメリットがあるのではないか、と感じさせられた。さらに、CALL 教室の場合は、一般的な教室や簡易 LL 教室と異なり、学生の座席が学習機に向かうよう配置されているので、講義形式の授業の要素を取り入れるのに工夫が必要だと痛感した。例えば、板書には、ホワイトボードを使う代わりに、OHP やパソコン画面などをもっと活用すべきであったと反省している。

技術的な問題もいくつかあった。50 台以上のパソコンを同時に使用しているとそのうちの何台かにフリーズなど、何らかのトラブルが発生する場合があった。制限時間内に演習問題を解く訓練をしている場合など、これは致命的である。また、せっかく演習問題を解いてもらったのに、その履歴が残らない受講生もおり、授業外の時間にもう一度同じ箇所を学習してもらうことになった。これについては、ソフトの終了の仕方にコツがあることを教えていただいたが、それで全てを解決できたわけではなかった。また、時事英語の教材の学習の一環としてソフトテレコを用いたのだが、こちらが不慣れなせいか、これに関しても苦労する場面があった。例えば、題材をサーバーにアップロードしておく際に、どうしても雑音が入ってしまうという問題に直面した。サイバーメディアセンターの方々にも相談し、アップロードに使用する教師機のマイクをミュートにすることを含め、幾つかの方策を試みたが、効果がなかった。結局、アップロードの度に、使用する教師機の端末の一つを毎回はずし、作業終了後にもとに戻すという方法で何とか切り抜けることができたが、もう少しスマートな方法があれば、と思っている。また、受講生が聞き取りの練習を行う際に、ヘッドフォンについているマイクが周囲の音を（少しだが）ひろってしまうという問題があり、画面上の音声のプロパティなどを操作しても全く効果がなかった。これについては明確な解決方法を見つけることができなかった。

最後に

これから英語教育における CALL の重要度はますます高まるであろう。CALL システムの魅力は何といっても、それが秘めている可能性にある。これからの課題は、教師がそのシステムを十分に使いこなせるようになることである。この原稿を書きながら改めてそう感じさせられた。

CALL について私の体験や感じたことを綴ってみた。少しでも他の方々の今後の参考になれば幸いである。